

## 広津柳浪『今戸心中』論

——心中事件の「解釈」と「二上り新内」をめぐって——

### 三 浦 大 輔

はじめに

明治二九年七月二五日、「文芸倶楽部」に掲載された広津柳浪の『今戸心中』は、当時大きな反響を呼んだ。この反響には、「柳浪の傑作なるのみならず、近時の佳作なり」という評価<sup>①</sup>と、「柳浪が続々として所謂狭斜小説を草せしは、これ既に流行を追ふ」というような、同時代の作品からの剽窃を疑う批判<sup>②</sup>などがある。この後者による汚名を返上するために、明治三〇年四月、「新著月刊」に「作家苦心談」<sup>③</sup>の連載が始まったことは、吉田昌志<sup>④</sup>、日比嘉高<sup>⑤</sup>、浅野正道<sup>⑥</sup>が指摘する通りである。諸氏はそれぞれの問題領域を論じるために、同時代の批評空間について触れている。一方、個別の作品として『今戸心中』を論じる場合、そのほとんどが「作家苦心談」で言及された内容を論拠としてきた。これは『今戸心中』だけに限

らず、そこで挙げられた柳浪の他の作品について論じる場合でもほぼ同様である。しかし、いずれにせよ、「作家苦心談」で柳浪によって明かされた、題材となった事件や出来事について、具体的な調査に及んだものは、管見の限り見られない。このような状況を踏まえ、本稿の主な目的を以下に定める。ひとつめは、「作家苦心談」をはじめ、その他の『今戸心中』についての柳浪の自作解説を手掛かりに、その題材となった事件、すなわちモデル事件を特定すること。ふたつめは、そのモデル事件と『今戸心中』を比較し、そこから明らかになった差異を中心に作品を分析すること。そして最後に、その差異によって何らかの仕掛けを持ったであろう小説が、当時どのように批評されていたのかを確認する。

一、自作解説

柳浪の『今戸心中』に関する自作解説は、異なる時期にはあるが、いくつか散見される。まずはこれらを整理することから始めたい。その主なものとして、「作家苦心談 其一（広津柳浪氏が近作の材料及び其の運用）」（以下、解説Aと称す）、「其時代の吉原の印象」（以下、解説Bと称す）、「今戸心中」と事実」（以下、解説Cと称す）が挙げられる。柳浪は、これらに共通して、自らが事件の当事者と近い間柄であったこと、また、『今戸心中』のあらずじが、「殆ど実事を其の採った」ことを示しつつ、それぞれの自作解説で、その事件が発生した時期、場所、心中した男女に関する情報、心中事件の現場の様子とその周囲の反応を明らかにしている。

まず、その時期について、解説Aで、小説における吉里にあたる人物が「吉原の中米楼に今より十三三年前に」居り、平田にあたる人物と「離別の後、二ヶ月位の中に情死を遂げた」と述べている。明治三〇年四月に掲載された解説Aは、当時柳浪に掛けられていた剽窃の疑いを晴らすために、明治三〇年二月一〇日、「帝国文学」に掲載された「江湖文学記者に与ふ」の一部を引用している。後藤宙外が各作家に取材する形式で解説Aは連載されていくわけだが、柳浪へのそれは、この二ヶ月の間に行われたことになる。ここから、

柳浪が『今戸心中』の題材として用いた事件は、明治一七年から同一年の間に発生したものであるとおおよそ確定することができる。次に、事件が発生した場所についてだが、これは解説Bに、その小説の題材となった男女は、「厩橋の上から、飛込んで、心中を遂げた。小説に今戸としたのは、吉原に近からしめんがためであつた」と、その書き換えの理由とともに明示している。続いて、その心中した男女について。小説の吉里にあたる女性は、解説Aで「女主人公吉里は名もその通りの花魁が吉原の中米楼に今より十三三年前にゐた（傍点省略）」とあることから、娼妓としての名前、所属していた遊廓の店名がわかる。また、吉里と心中した美濃屋善吉にあたる人物についても解説Aで、「吉里は以前ひどくふつてゐた古着屋某（傍点省略）」と、その職業について触れている。そして、心中事件の現場の様子と周囲の反応について。解説Cで「お厩橋の欄干に、妓の扱帯が落ちて居た」とあり、この心中の形跡に対し、解説Bでは、「態と踪跡を晦まさんの拙策だと誰も思つて居た」とある。これは解説Cの「彼処で死んだやうに見せかけて置いて、その実何処かへ逃げて行つたんだらうと云ふ噂があつた」という内容とも共通している。周囲は彼らが心中した様子を見ても、にわかには信じられなかつたとされている。

## 二、モデル事件と小説の差異

前章において、柳浪が題材に用いた事件の発生した時期が、明治一七、八年頃であること、及び、心中した女性の娼妓としての名が小説同様、吉里であり、中米楼に所属していたことを確認した。当時の吉里については、中村豊之助の『新吉原細見記 故郷年齢』に詳しい<sup>⑪</sup>。これの「京町二丁目」にある「中米楼」に所属する娼妓一覧を見てみると、「吉里」の名があり、「神田区」、「中西とら」、「文久二年七月生」とある。これらの情報を手掛かりに調査した結果、この人物についての記事が、明治一八年二月の「読売新聞」、「自由燈」、「東京絵入新聞」、「改進黨新聞」に掲載されていることがわかった<sup>⑫</sup>。しかし、これらの報道内容は、それぞれの新聞記事の間で、特にその娼妓の氏名に若干の差異が見られる。これは、中西とらの心中事件とは関わりのない娼妓の起こした事件が、同時期に発生し、情報の混乱が生じているためと考えられる。よってここでは、より詳細に事件の内容を把握するために、発見された記事を一つひとつ検証する。これによって浮かび上がった、複数の報道記事に共通する要素と小説を比較する。

まず、明治一八年二月五日の「読売新聞」に掲載された記事、「情死の書置」には、次のようにある。

本籍八神田辺にある中西おとら（二十四年）と言ふハ新吉原京

町二町目の或る貸座敷の娼妓なるが一昨夜三時ごろ自分の部屋

へ兼て馴染を重ねし何某と情死する旨の書置を残し何処へか逃

亡したので楼主は大きに驚き諸方へ手配りして所在を探索中な

るが今に行方が知れぬと言ふ（傍線、引用者）

ここでは本名、住所、年齢が『新吉原細見記 故郷年齢』にある

「吉里」の情報と一致している。また、この「情死の書置」の隣の

欄には、「欄干に女帯」という記事が掲載され、「本所元町警察署の

巡查が昨曉厩橋を通行されると橋の欄干に女帯が一ツ打掛けてある

ハ必定身投げならん（傍線、引用者）」と推測する様子が伝えられ

ている。この推測はこの後の箇所において、別の事件との関連性を

示唆するに至っているが、「女帯」があった場所は、柳浪の述べた

心中の場所と一致している。

次に「改進黨新聞」の記事を確認する。ここでは、この事件に対す

る周囲の反応が、わずかではあるが掲載されている。

次の一組ハ吉原京二中米楼に出稼の娼妓神田富松町鈴木豊二郎

方同居中村とら（二十八）にて昨日の午前四時ごろ座敷を脱て

落人となつた跡に遺してあつた仮名釘流の一通に曰く「わたい

ハ深い染馴のお客と志んぢう志ますからあとのところハ何ぶん

よろしく」と漸く読めたゆゑ早速其筋へ届て出ましたが此深い

馴染のお客と情死のお見立を蒙つた色男ハ日本橋近辺の或呉服屋の番頭だと言ふが此情死ハ今に蘇生を志まずでせう(傍線、引用者)

この記事の最後の箇所傍線部は、「彼処で死んだやうに見せかけて置いて、その実何処かへ逃げて行つたんだらうと云ふ噂」(解説C)と同旨であると言えよう。また、中西とらと共に心中したとされる人物について、「日本橋近辺の或呉服屋の番頭」と、若干ではあるが触れられており、本文との共通性が見られる。次の「自由燈」でも、これまでと同様にいくつかの一致点を見せながら、中西とらと心中した人物について、更に詳しい情報を掲載している。<sup>15)</sup>

昨日の朝新吉原中米楼の若い衆が二階の夜具を揚てあるくと紅梅(本名中西とら二十二)の座敷にハ青□がごろ寝をして居るばかりで小いらんハ居らぬゆゑ大方外の座敷にでも居ること、搦はず夜具を片付ると其下に一通の書状やうのものが有ゆゑ手に取上て表書を見ると旦那様かきおきの事と記してあれハ驚ろいて内所へ持ち行き主人にも斯と告げ尚あちこちと紅梅を尋ねても皆異姿も見えぬにより件のかきおきを開封すると其文言にわたくし事永々お世話様に相なり其上わがま、なる所業をはたらき何共申し訳無御座候へども先頃より富沢町の或人と深く言交し義理に迫りて今晚欠落いたし心中の覚悟に御座候ま、是ま

での御礼かた〜一筆書残し参らせ候云々と認ためありしゆゑ楼主よりハ直ちに其趣むきを公儀へ訴たへ出たるよし追々〇〇に近寄から種々な鬼ふせぎが起ります(傍線、引用者)

ここでは心中した人物は「富沢町の或人」とあり、本文の美濃屋善吉が店を構えていた場所と一致する。「東京絵入新聞」でも「同町(京町——引用者、注)二丁目中米楼の娼妓神田松富町鈴木方同居中西おとらハ何故なるか昨日午前三時頃自分の部屋ハ馴染のお客と訳あつて情死する云々と書置家出せしま、行衛知れず多分馴染のお客といふハ日本橋辺の或呉服屋店の黒鼠ならんとの事(傍線、引用者)」と他の記事と同様に一致点が見られる。この翌日、同紙ではこの事件に関連したものととして、「茶博多の女帯」と「紺博多の男帯」が「吾妻橋」で巡査によつて発見された旨が掲載されている。心中の形跡と見られる遺品、及びその場所は柳浪の証言と差異があるが、警察に呼び出された「中米の主人」は「一件の二品を示さる、と茶の方ハ全く娼妓の所持品に相違ない」としている。ただ、この記事も「改進新聞」と同様、「恐らくハ斯る手を巧んで其実延延しならん(傍線、引用者)」と推測する「中米の主人」の様子を最後に報らせている。これらの一致点から、柳浪が題材にしたのは、明治一八年一二月に起きた中西とらの事件であると言えるだろう。

ここまでで、中西とらに関する記事は、今回の調査で発見された

全てを引用した。柳浪の証言した内容にはなく、これらの記事に共通していることは、中西とらの残した書置きに、馴染みの客と情死する旨が明記されている点である。これを小説の「遺書」と比較したとき、その違いは明確に表れる。

一筆書残し参らせ候、無拗覚悟を極め申候、不便と御推もじ願上参らせ候、平田さんに済み不申候、西宮さんにも済み不申候、お前さまにも済みませぬ、されど私事誠の心は写真にて御推もじ被下度暮々もねんじ上げ参らせ候、平田さんにも西宮さんにも今一度御目に掛りたく、此のみ心残りにおはし候、何方さまへもお前さまより宜敷御伝へ被下度候、取急ぎ何も〜申残し参らせ候

新聞報道における書置きでは、先にも触れたように、馴染みの客と心中する旨を告げているのに対して、本文の「遺書」には平田や西宮への想いが綴られ、情死の相手である善吉のことに關しては一切触れられていない。またこの「遺書」の文章は、これまで平田から届いた手紙と手紙との間に挟んだ写真を包んだ紙に書かれ、その写真は、「平田と吉里のを表と表と合せて、裏には心と言ふ字を大きく書き、捻紙にて十文字に絡げ」られていた。この差異は何を表しているのだろうか。

『今戸心中』が発表された時期に、写真を用いた心中事件を「読

売新聞」が取り上げている。明治二八年五月九日に掲載された「美人、軍曹の写真を抱て牛ヶ淵に投身す」の概略は、次のようになる。

「同町（麴町——引用者、注）四丁目十一番地金物商伊勢屋某方」で「下婢」として働いている「高藤ふじ」の妹、「お糸（二十一年）」は、「隼町なる陸軍予備病院に入院」していた「某軍曹」と「退院の後ハ必ず夫婦にならんと文を取交はして固く約束を為した」。しかし、「病氣」が「快癒」し「退院」した「軍曹」は、その後音信不通となつてしまつたため、「お糸」は「文を送」つたが、それでも「何の返事も」なかつた。「男心の情なきを恨み思ふ人に添はずハ世に存へる甲斐なしと氣も狂はん斗り歎き悲」しんだ「お糸」は、同年五月七日の「十時を過ぎ」た頃、「牛ヶ淵公園」で「入水」してしまふ。その際、「予て忘れぬ形見にとて取交し置きたる軍曹の写真を懐にして」いたという。また、これと同じ用途のものとして、明治二九年二月二五日掲載の「写真と情死す」が挙げられよう。「越後南蒲原郡三條町鉄物商金井某」は「同地本寺小路」の「貸坐敷某樓の娼妓に馴れ染め末ハ夫婦の起誓堅く変らぬ契り」を交わしていた。しかし、「数日前」に「登樓」すると、「其の娼妓ハ四五日前他の客に躰身せられ他所の眺めにな」つたと告げられる。これを聞いた「金井某」は「氣脱せんばかりに驚」いたが、「今日ハ此まゝにて帰るべけれど折角来しことなればせめて一杯飲ませ呉

れよ」と申し出る。店側は言われるままに酒を出したが、「忽ち何やら怪しき物音聞」こえ、「鴛母番頭」が駆けつけると、「金井八言替せし女郎の写真を前に置きて写真の喉元及び足の辺を剃刀にて志たゝか突き通し己れも腹一文字に掻き斬り今や將に喉を突」こうとする寸前だった。両者とも心中の叶わなかつた相手の代わりとして

写真を用いている。特に後者は、「喉元」、「足」という特定の部位を傷つけていることから、相手の身体を明確に意識していることがわかる。緒川直人は明治一〇年代の写真館について考察する中で、「栃木新聞」の投書から、当時の大衆にとって、写真は「対象との階層的・物理的・精神的な（距離の縮減）、つまり（対象との近さ）の疑似体験を堪能できる」ものとしている。作品発表当時、これは先の新聞の例とも共通、もしくは、その傾向は更に強まっていたと言えよう。

このような習慣があつたことを踏まえ、『今戸心中』の最後の場面を考えると、その不自然さが浮かび上がってくる。吉里は平田の写真の裏に「心と言ふ字を大きく書」くことよって、平田に「誠の心」があることを示しておきながら、それを用いて心中するのでなく、「隅田河の岸」に「娼妓の用ゐる上草履と男物の麻裏草履」を残し、おそらく善吉と共に身を投げたことをも示唆している。モデル事件では、その形跡に対し、周囲の人物は狂言ではないかと疑

つていたことは先に確認したが、このような要素は小説からは消え、吉里の「遺書」の内容を信じ、歎く小万の姿を通してその最期が写しだされている。つまり、モデル事件において心中することを明言しているのに対し、小説では、吉里の心情と行動は乖離したものである。

### 三、近松の心中物として

心情と行動の乖離という柳浪の書き換えによつて生まれた要素は、第五章にて、西宮がお梅と欄干に佇む場面で、東雲の部屋から聞こえてくる、「二上り新内」に象徴されていると言えよう。

わるとめせずとも、そこ放せ、明日の月日の、無い様に、止めるそなたの、心より、かへる此身は、どんなにく、つらかるう——

この唄が聞こえてくるまでに、次のような描写がある。上の間で平田は、「上を仰き眼を合り、後背からは涙が頬へ線を引き、下唇は噛まれ上唇は戦へ」ながら「帯を締」めようとしますが、「其帯の端に吉里は膝を投げ掛け、平田の羽織を顔へ当て、伏沈んで居る」ため、「帯を引く」ことができないでいる。しかし、次の間に居るお梅に、既に午前五時を過ぎたことを聞いて、「遅くなつた」、「さア出掛け様」と慌てるが、そんな平田を西宮が、「何か忘れた物があ

るんぢやアないか」と言つて、再び吉里の居る部屋に押し戻す。あくまで、東雲の「わるとめ」の唄は、偶然「対面の座敷」から聞こえてくるのであるが、吉里、平田のその時の状況と重なっていることは明らかである。そして、より正確に言うならば、この唄は平田の心情を表している。「止めるそなたの、心」と「かへる此身」が対立的に描かれてはいるのと同時に、「かへ」らなければならぬ「此身」は、端的に「つら」とある。ここに、自らの想いと行動の乖離を見て取ることができる。ちなみに、吉川英史の『日本音楽の歴史』に拠れば、「二上り新内」は天保の末頃に流行したとあるが、その人気は明治にも再燃していた。獄堂野史は『二上り新内の序で、この版元である「松泉堂の主人」に、「何と錢設の種ハ無欵」と聞かれた際、「過日商用で諸地方を遍歴して看と鄙も都も二上り新内が流行」していると答えたことを記している。<sup>20</sup>「二上り新内」は当時の流行歌だったと言える。

このように、登場人物の状況や心情を、第三者が偶然演奏する音楽に乗せて表す手法を、歌舞浄瑠璃では「他所事浄瑠璃」と呼ばれる。これは例えば、近松門左衛門の『曾根崎心中』に見ることができ<sup>21</sup>。「曾根崎心中の道行」の場面で、二人が「曾根崎の森」に向かう最中、二階座席から次のような「歌」が聞こえてくる。

どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬ物ぢやと思へども

(中略) どうした事の縁ぢややら、忘るる隙は無いわいな。それに振捨て行かうとは、遣やしませぬぞ手にかけて、殺して置いて行かんせな。放ちは遣らじ

これは元禄一七(一七〇四)年刊行の『落葉集』第七卷に収録された「心中江戸三界」<sup>22</sup>の一部を引用している。この第七卷は「古来中興当流はやり歌」を集めたものであることから、この唄は、『曾根崎心中』初演時の流行歌と言える。この場面について山田美妙は、「他所の歌で、当人の身に当たるのを引き、人魂を見せて凄味を添へ、怠らず婦女子の情の哀れにあどけない所を示し、怠らず情緒の濃やかな所を利かせ、遂に無惨な最期を出した所、息も吐かれぬ妙味有り」と述べている。<sup>23</sup>当時、『今戸心中』は近松の心中物との関連において批評されていたが、その理由は、廓を舞台とした心中物という単純な類似性だけに留まるものではないだろう。物語の主たる登場人物たちに向けて意図的に唄っているわけではなく、偶然、離れた場所から彼らの状況や心情を表す唄が聞こえてくるという手法において、両者は共通しているのである。

『今戸心中』において仕掛けられたこの手法は、読者にもある程度認識されていたと考えられる。荒川漁郎の「最近の創作界」では、明治二九年一月三日、「文芸倶楽部」に掲載された「浅瀬の波」の批評を、これまでの柳浪の創作を振り返りながら行っている。<sup>24</sup>ま

ず「浅瀬の波」について、「こ、には場あり、景あり、波瀾あり、変化あり。急迫激切の劇中、そこに人物の活動するを觀、動作の發展するを認む」という言辞によつて評し、「巻中の白眉」としてゐる。登場人物の描写について、「活動」、「動作」、また、物語の展開について「場」、「景」という、それぞれ演劇にまつわる用語で評していることは、注目に値する。「浅瀬の波」のこのような特徴は以前から存在していたと、荒川は見ているからである。この「浅瀬の波」の評価の後、柳浪の作品を遡っていく。ただし、具体的に作品名を挙げるのは「今戸心中以来筆力一段の進歩をあらはし（傍点省略）」と位置付けた箇所のみであつて、それ以前はおおよその傾向を述べるに留まつている。荒川はその傾向について、「不自然に陥るの誹を免かれざりし」としながらも、「其の言葉に於て、對話に於て、その後景に於て、装置に於て、可笑しき節の見出され、作家が狭き觀察を露出して、見苦しき失敗をとりしこと少かりしなり」と、消極的にはあるが評価しており、ここでもまた、演劇に關連する用語を用いている。つまり、予てから見られた柳浪のこのような特徴は、「浅瀬の波」で結実し、それが顕著に表れはじめたのが『今戸心中』だったというのが、荒川の批評の骨子として考えられる。

#### 四、他所事浄瑠璃としての「わるどめ」の唄

先に示した通り、『今戸心中』における「二上り新内」は、流行歌であり、登場人物の心情、状況を偶然唄っているという点においては、『曾根崎心中』にある他所事浄瑠璃の手法と同一であると言える。これを前提に本章では、第五章で流れた「二上り新内」の音楽としての特徴が、吉里の最期とどのように關連しているのかを考察する。これらはそれぞれ、モデル事件から小説への書き換えによつて生まれた、心情と行動の乖離という要素が表れた箇所である。この意味において、その関連性を考察することは重要であると考えられる。

明治三〇年三月発行の「文芸倶楽部」は、「二上り新内」について、次のように掲載している。<sup>86)</sup>

常の新内は曲節面白くして、之に伴ふ楽譜の音調懐愴たる点より、人を感動するに止まれど、此の二上り新内の人を感動するは猶その上に文中の一句一字贅冗の言なく、肺肝を衝き骨を彫むの名句を以て満ち／＼たればなり、之に伴ふ楽譜に至りては、其の面白さ寧ろ常の新内に劣りて、絡如たり繹如たりとは行かざるも、旨と唱ふ人の声を聞かす者なれば、唄ふ者の巧みなるに於ては、哀れに悲く聞ゆること却つて常の新内に優るべし



この箇所が続いて、この論者である無黃道士は、「二上り新内は、昔時娼妓の隆盛なりし世に行はれたるにも拘らず、通常男女の恋を写す者」が多いとしているが、「余が見たる数十篇の秀逸中、娼妓を写したるもの」として、『今戸心中』にある「わるどめ」の唄を紹介している。まさしく遊里における別れを描いたものとして、ふさわしい唄と言えよう。注目すべきは、「肺肝を衝き骨を彫むの名句を以て満ちくたれば」という箇所である。「常の新内」との比較からこのように言及しているが、その悲しい曲調と「名句」が如何に深く聴く者に染み込んでいくかが察せられよう。

本文においても、その影響力が認められる。平田と別れた後の吉里は、自分の部屋で善吉と二人で居るにも拘わらず、放心状態になっていた。しかし、善吉の「これがお別れなんだ。今日限りもうお前さんと酒を飲むことも無いのだから」という言葉を聞き、妄想混じりに平田の事を思い返した後、吉里は善吉に「御返杯」を始める。その直前に語り手によって述べられた、「別離わかれと言ふ事について、吉里が深く人生の無常を感じた今、善吉の口から其言葉の繰返されたのは、妙に胸を刺される様な心持がした」のが、その「御返杯」を始めた理由だろう。ただ、善吉の「これがお別れなんだ」という言葉の後、平田の事を思い返している間、吉里は意識的ではないだろうが、「わる止めわるせずともと東雲の室で二上り新内を唄ったの

も、今耳に聞いて居る様である」と、その唄をもう一度反芻していることを、見逃すわけにはいかない。この時「二上り新内」は、吉里にとつて、全く異なる人物である平田と善吉を、袖にする側の人物として繋ぐ紐帯の役割を果たしている。これを契機に吉里は、善吉にとつてなぜ「これがお別れ」なのか、その理由を聞くことになる。

私しやもう東京にも居られなければ、何処にも居られなくなつたんです。私しも美濃屋善吉——富沢町で美濃善と言つちやア、些たア人にも知られた店も有つて居たんだが……。(中略)

三四人の奉公人も使つて居たんだが、僅か一年過つか過たない内に——花魁の処に來初めてから丁度一年位になるだらうね——店は失なすし、家は他人の物になつて了ふし、は、は、私しや宿無になつて了つたので……。

自分が原因で善吉の「産を破らせて家をも失はしめた」ことを知つた吉里は、「平田と善吉の事が、別々に考へられたり、混和いりまじつて考へられたりする」ようになる。ここから

善吉も今日限來ないものであると知つては、此ほど実情のある人を、何で彼様に冷遇くしたらう。実に悪い事を為たと、大罪を犯した様な氣のする傍から、善吉の女房の可哀想なのが身につまされて、平田に捨られた自分の果敢ひたむきなさも亦一入ひとひらになつて來る。其で、耐らなく平田が恋しくなつて、善吉が氣の毒にな

ツて、心細くなつて、自分が果敢なまれて、沈んで行く様に森となつて（後略）

と続く箇所においては、吉里は平田への想いをそのままに、自らをも含め、袖にされた人物全員に同情を抱くようになる。柳浪は解説Aで、中西とらが「以前ひどくふツてゐた古着屋某なるものと、彼の好男子と離別の後、二ヶ月位の中に情死を遂げ（傍点省略）」た、「誰れにも分からなかつた」その理由を「聊か解釈を試みたいと思つたので、『今戸心中』をかい」と、その創作の動機について語っている。そして、「自分が恋の絶望を経験して、古着屋が今まで恋の絶望の境界にゐた其苦しみを覚り、始めて激烈に同情を表した結果」と述べている。先の本文の引用箇所には、その「解釈」が表れていると言えよう。ただし、その「解釈」とは、作者である柳浪のみが納得するためだけのものではない。留意すべきは、当時において馴染み深い「他所事浄瑠璃」という演劇的手法で、「肺肝を衝き骨を彫む」という特徴を持った流行歌を用いることによつて、登場人物の心情の変化が読者にも共感できるように描かれたことである。初めは平田の心情を表していた「わるどめ」の唄は、吉里の内面に深く染み入り、善吉の苦悩を知る契機を作り、「同情」を抱かせた。この「同情」は、平田への「誠の心」と共存し、結果的に自らの心身も乖離するまでに至らしめたのである。本文を「二上り

新内」にまつわる手法、特徴から、このように辿ることも可能だろう。

おわりに

本稿はここまでで、柳浪が述べた『今戸心中』に関する自作解説から、その題材とした事件が、明治一八年二月に起きた、中西とらと、その「馴染みのお客」による心中事件であると特定した。これについて報道した新聞記事と小説を比較すると、その書置きに、明確な差異があることが浮かび上がった。「馴染みのお客」と心中することを明記していた新聞に対して、小説ではその人物にあたる善吉については一言も触れず、平田への想いが主な内容だったのである。これと共に、写真を用いて平田に「誠の心」があることを示しながら、それにも拘わらず、善吉と心中したであろう形跡を残した。ここから、心情と行動が一致しない状態として描かれていることを明らかにした。野寄勉は、心中した吉里と善吉の、「二人の死体」が「放されること」について、「表題の命名からすれば伝統的かのように装われてはいるが、死によつてしか成就しえない相思相愛を前提とする「心中」の根幹に肩透かしが仕掛けられている」と述べているが、その「肩透かし」の結末に至るために、当時流行していた唄を、「他所事浄瑠璃」という馴染み深い手法で用いている

ことは、これまで稿者が述べてきた通りである。言わば、これまでの「心中」の根幹」を打ち破るために、「他所事浄瑠璃」という手法としての型を踏襲したのである。

また、そのような伝統的な話型に収まらない結末のため、同時代の読者からは批判の声が挙がったことも事実である。「女学雑誌」に掲載された「小説家と同情」の論者は、柳浪は「人殺しの好きな小説家なり」、あるいは「大なる同情を作中の人物に寄せ、之かために涙を濺ぐことあるを認むること能はざる」という文句をもつて推断し、また「少年文集」掲載の「悲劇と同情」では、「悲劇に尤も欠ぐべからざるものは、実に同情」であるのに、「柳浪一輩の徒は唯悲惨を描きて此主要の点を閑却せるに似たり」と喝破している。しかし、これらの批判は、次の批評に對置させた時、やや内容や結末に偏り、そこにある手法を看過してしまっているものとして捉えなければならぬだろう。

美妙は同情乏く、柳浪又熟したる同情を欠く。(中略)彼は吉里に同情せるにもあらず、河内屋のお染に同情せるにもあらず。同情せずと雖も、彼等を難境に置くに充分の用意を以てす。空しく彼等を死せしめず、容易く彼等を悲傷せしめず、死も又自ら安んずる所あり、苦も又自ら甘んずる処あり、其の甘んじ安んずる所に向て悲痛の最後を遂げしむ。故に読者は感傷すと雖

も、篇中の人物は安んじて死に行き、読者不快の感ありと雖も、篇中の人物は甘んじて苦に堪ふ。此用意はやがて彼れが同情なり。(傍点省略)

作者が登場人物に「熟したる同情」、すなわち直接的に憐れむような態度を取るのではなく、「悲痛の最後」に「安ん」じるだけの「用意」をしていることを、柳浪の「同情」としている。この「用意」、「同情」とは、「二上り新内」を用いた「他所事浄瑠璃」の手法として見て問題ないだろう。また、この論者は、「悲痛の最後」、すなわち、伝統的な話型に収まらない結末であるがために、「読者は感傷す」、あるいは「不快の感」を覚えるとしても、このような手法を用いることによって、登場人物の心情の変化が表されていることにも気付いていると言えよう。

柳浪は、題材とした心中事件への自らの「解釈」を、読者にも共有できるように、演劇的な演出方法、つまり、「他所事浄瑠璃」の手法を用いた。ただ、そのような手法によって、これまでの心中物の話型に収まらない最後に展開させたことに、本作の特徴があると見える。「他所事浄瑠璃」という馴染み深い手法で、心中物の型を破ったことよって本作は、最後の場面の陰惨さを批判する、もしくは、その場面に至るまでの手法を評価するという趣旨で、反響を呼んだのである。

注

- ① 無署名「今戸心中 広津柳浪作」(『帝國文学』明治一九・八・一〇)  
 ② 無署名「江湖文学記者に与ふ」(『帝國文学』明治三〇・二・一〇)  
 ③ 「作家苦心談 其一(広津柳浪氏が近作の材料及び其の運用)」(『新著月刊』明治三〇・四・三)  
 ④ 吉田昌志「広津柳浪と泉鏡花——『親の因果』と『化銀杏』の関係——」(『日本近代文学』平成二二・五・一五)  
 ⑤ 日比嘉高「第1章 メディアと読書慣習の変容」(『自己表象』の文学史)平成一四・五・二五 翰林書房)  
 ⑥ 浅野正道「招喚される作者の声——明治三〇年前後「作家苦心談」の周回——」(『日本近代文学』平成二四・一・一五)  
 ⑦ 前掲③に同じ。  
 ⑧ 広津柳浪「其時代の吉原の印象」(『新小説』明治四五・五・一)  
 ⑨ 広津柳浪「『今戸心中』と事実」(『新小説』大正二・二・一)  
 ⑩ 前掲③に同じ。  
 ⑪ 中村豊之助編『新吉原細見記 故郷年齢』(明治一九・六・二 出版屈/明治一九・一〇 出版の日には記されていない)  
 ⑫ 中西とらの心中事件に関連する記事を掲載した各新聞のタイトルは次の通り。

新聞名	掲載日
読売新聞	一一・五
改進黨新聞	落人三組
自由燈	小いらんの欠落
東京絵入新聞	厩橋に女の帯・花街の叢譚
	謀計の一ツか
	昨日の小いらん
	帯がプランコ

- ⑬ 「落人三組」(『改進黨新聞』明治一八・二・五)には、中西とらが書きを残して行方不明になった事件が、次の出来事と纏められて報道されている。「昨日の夜新橋発の終汽車(十一時)が品川の停車場へ着くと同場に待合せて居た男女の客が切手を買って乗込まうとする其動靜が如何にも不審なゆゑ同場に詰合の巡査が引留めて住所姓名を聞く」と男は牛込東横町十四番地水沢新次郎女ハ根津の貸座敷菊武蔵の出稼娼妓紅梅(実名小林こう)にて全く其夜手を把り合ひ横浜へ落人と出かける積ですと申立てたので其筋へ連帰り女ハ樓主へ引渡されし(傍点、引用者)とある。これに続いて、中西とらについての記事が掲載されている。
- ⑭ 前掲⑬に同じ。なお、ここでは、書置きを残していった娼妓の名は「中村とら」になっているが、この「村」のルビは「にし」になっており、また、同紙明治一八年二月六日の統報「謀計の一ツか」では、「中西とら」に修正されている。
- ⑮ 「小いらんの欠落」(『自由燈』明治一八・二・五) □の文字は恐らく「衣」という文字だが、不鮮明なため確定できない。ちなみに「青□」のルビは「しんぞ」となっており、「新造」のことであると推測できる。また、ここで「中西とら」の遊廓での名は「紅梅」になっており、前掲⑬注で示した駆落ち未遂を起こした「娼妓」の名と混同していることがわかる。
- ⑯ 「花街の叢譚」(『東京絵入新聞』明治一八・二・五)  
 ⑰ 緒川直人「明治中期迄の写真舖顧客と写真蒐集家齋藤月岑——写真の大衆化の「受け手」論的一考察」(『マス・コミュニケーション研究』平成二五・一・三一)  
 ⑱ よ、き生「写真舖ノ感」(『柘木新聞』明治二二・九・一)  
 ⑲ 吉川英史「第五章 民族音楽大成時代」(『日本音楽の歴史』昭和四〇・六・二〇 創元社)

⑳ 獄堂野史『二上り新内』(明治二三・四・二五)印刷/明治二三・四・二六 御届、松泉堂)。獄堂野史はこの会話の後、「其二上り新内とやらを新調したら如何でせう」と持ちかけているが、この「わるどめ」の唄は、高寄修助出版/栗田素一編輯『難曲粹乃友』(明治一九・一・一五)にも掲載されていることから、彼らが「新調」した曲ではないことがわかる。

㉑ 山田美妙『日本浄瑠璃叢書 卷二』(明治二七・三・一一) 明法堂)

㉒ 井筒屋床兵衛『心中江戸三界』(『落葉集』元禄一七・三 京都大学文学研究科図書館所蔵)

㉓ 前掲㉑に同じ。

㉔ 無署名「今戸心中と情死」(『太陽』明治二九・九・五)、無署名「心中を題目とする小説」(『少年文集』明治二九・一〇・一〇)、無署名「三 社会小説につき」(『早稲田文学』明治二九・一一・一五)

㉕ 荒川漁郎「最近の創作界」(『太陽』明治二九・一二・二〇)

㉖ 無黄道士「二上り新内」(『文芸倶楽部』明治三〇・三・一〇)

㉗ 野寄勉「広津柳浪「今戸心中」を読む——思いと身体は重ね、ずらされ——」(『日本文学文化』平成一六・一二・一五)

㉘ 鴉村「小説家と同情(一葉全集を読む)」(『女学雑誌』明治三〇・二・一〇)

㉙ 無署名「悲劇と同情」(『少年文集』明治三〇・一・一〇)

㉚ 無署名「広津柳浪及其近作」(『世界之日本』明治二九・九・二五)

(付記) 本稿において、『今戸心中』の引用は全て、初出時のもの(『文芸倶楽部』明治二九・七・一五)を用いた。また、本文、資料の引用に際し、旧字は新字に改め、振り仮名は適宜省略し、「志」の平仮名は「志」と表記した。